

出産突起土器の出現背景

小 林 広 和

はじめに

1) 出土状況（土塚墓）

2) 出産突起・理解の為人面突起

3) 出産突起

4) 製作目的と製作者像

あとがき

はじめに

縄文中期中葉の区画文土器Ⅴ段階（小林 2004）においては、文様の特徴が半肉傾向となり区画文の隠退が顕著となるが組成の中に、人面装飾が新たに加える。又、該期での文様群の中で主流を占めるデザイン化された一つにU字を横に用い蛇頭に見立てた立体的装飾が顕著である。筆者はそれらに対し、藤内期以来から用いられている伝統的突起にU字を配したⅠ類、人面装飾の頭部に取り付けたU字蛇頭Ⅱ類（以下、U字）、土器の口縁部にW字状文を貼り付けたⅢ類の3分類を行った。さらに、U字蛇頭・人面Ⅱ

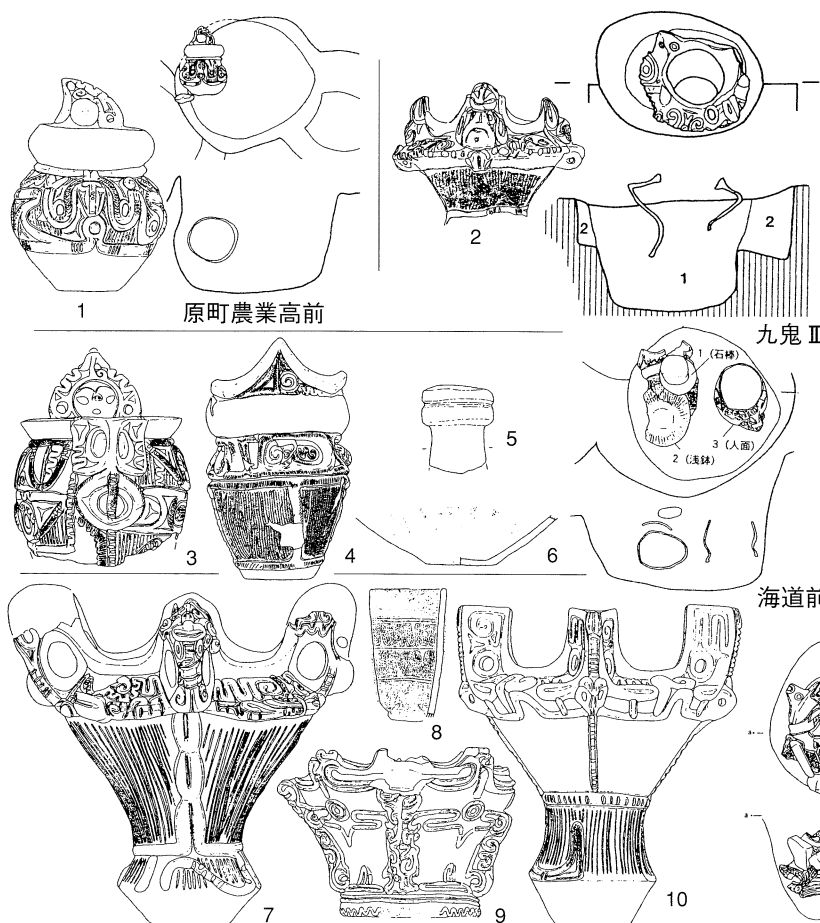
類装飾の系譜のから出産状況を現す突起土器の存在を確認するに至った。今回はその突起の有する意義、出現背景に触れてみたい。

1) 出土状況（土塚墓）

海道前：ハヶ岳南麓の東部に位置する。区画文Ⅴ段階・関東9 a 期に相当する。埋納順は1、2が並列し底より10 cm 浮いた状態で出土している。土器3は胴部中央以下が故意に打欠を行った後、逆位に埋設される。土器6はその横10 cm 程度離れて横位に据えられ、その上に6を擁護する

かのように浅鉢8、石棒の順で据えられ、埋め戻される。その状況からは土器棺として6の主要部が想起される。遺物の状態は、3は上記、4は4単位波状口縁の一对と胴部下位の一部に、6は胴部上半以上、5は身部上半以下がそれぞれ打欠きされている。以上4点は、儀礼具として把握されるもので、打ち欠きにより6は口縁部消失、3.5は胴部以下消失いずれも逆位埋設される手の込みようで複雑な儀礼の跡が読みとれる。容量は3は24 cm、(21, 8) cm、4は23, 3 cm、45, 7 cm、6（24 cm以上）、器高9, 5 cm、7（20, 7 cm）、16, 6 cmを計測する。

原町農業高前：ハヶ岳南麓の中央よりやや西側に位置し区画文Ⅴ段階・関東9 a 期に相当する。56号住居北東壁際で検出されたピットで、報告書によれば西壁の一部に食い込んだ掘削がなされ貯蔵穴の性格も考えられ、転用による墓坑とも考えられる。底面から20 cm 浮いた状態で横位置に出土している。覆土は交互一層で埋め戻しが認められるとしている。土器棺の状態は、



第1図 出土状況（土塚墓）

打欠行為が顕著であり底部の一部と人面装飾の先端に認められる。土器1の容量は口径18.5cm・高さ37.5cmを計測する。

野呂原：笛吹川左岸地域に位置する。区画文V段階、関東9a期に属する。土坑底部に、口縁部が打ち欠きされた12が横位に据え付けられ11はその口縁部に付近に置かれていた。土器の状態は12は口縁部が打ち欠きされ割れ口は意図的に磨かれた痕跡が存在する。人面は、突起部のみが破片で埋納されている。土器12法量は、口径25.8cm、高さ33cmである。突起と土器の関係は別個体を土坑内で一個対のように見せかけた埋納する異個体接合である。

九鬼Ⅱ：御坂山塊を超えた山梨県東部地域・桂川上流（相模川）域に位置する。塔状突起をメルクマールとする時期で、関東9b期に相当する。現状では断面が鍋形を呈するが、筒型に近い土坑が復元される。底部より20cm程度浮上して僅かに斜位の状態で埋納される。土器の状態は、胴部中央より下位は打ち欠きにより消失、蛇頭突起の頂部がやはり打ち欠きされる。法量は、口径20cm最大幅32cm、現状高さ21cm、突起までの高さ25cmである。

一の沢西：笛吹川左岸地域の支流、黒沢川左岸に位置する。土坑底部より僅かに浮上する。7は横位、9は正位に土坑内に据え付けられ、扁平礫、礫等で石囲状に囲み、8を打ち欠き7・10を覆うように埋設する。主要部は7、9に充てられるが9も考えられなくもない。土器の残存状態は、7は押し潰され破損するが打ち欠きは出産突起の頂部に限られている、

10は胴部下位が打ち欠きで底部を欠く。8は胴部以下が、9は突起4本全て、胴部中央より以下を打ち欠きされる。

法量は、7は口径63cm、高さ59cm、10は口径51cm、高さ56cm、8口径13cm、高さ24cm、9は口径41cm、高さ30cmである。

野呂原：出産突起土器で、住居中央の炉石上に逆位で出土している。土器の性格からは母親が同時に死亡（梅原2004）した可能性が考えられ中、廃屋墓として一考されるべき資料といえる。

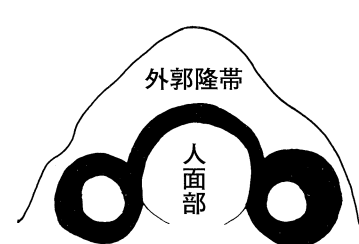
以上、古段階では、容量から観て胎児・新生児の棺として想定される土器を打欠き、土坑底部から浮いた位置に横位に配置し基本態とする。それに伴って異体接合No.11+12や大がかりな儀礼が行われた跡が確認され、諸事情により儀礼が異なった相を呈している。異体接合は、人面部と土器口縁部を打欠、割口を磨き一個体の相として埋納に及んだ例であり、Ⅳ類人面は、土器胴部を母体と見立てた（大塚1979）、その頭部として組合わされ胎児再生を願った棺そのものであり、人面突起自体の用法の解釈についても今後さらに論議を呼ぶものと思われる。

出産突起では、その意匠から胎児埋葬の土器埋納土坑であると考えられる。突起部の蛇頭の片側か、両方の打欠が顕著であり出産直前の固体を殺し、身代わり、あるいはあの世での正常の形とし墓坑に埋納する過程で胎児再生を願ったものと解釈される。一の沢では儀礼初期段階の4固

体の製作・儀礼打ち欠き後の埋納からは複雑な呪術の跡が読み取れ、以後打欠による複数固体が埋納された土坑が時空を超えて散見されるようになる。

このように、甲府盆地では、近年人面突起土器の土坑埋納が増加傾向にあるが、地域的に土坑に土器を埋納する例が多くこの為であるのか、突起土器の製作目的から派生する要因であるのか、あるいは、それ以外であるのか今後の検討課題として残るが、人面古期段階・3例、新期段階・3（1例は盆地外）例は突起土器の特殊性と全体の検出例から見れば決して少ない数ではなく、後述する突起自体の性格を暗示する。

2) 出産突起・理解の為人面突起



第2図 人面部とΩ文

人面部分は、外郭隆帯文（Ω文）＋隆線文（Ω文）＋人面で構成される（第2図）。人面に直に接する隆線文は、頂部が水滴のように先鋭となるものは少

なく清水ヶ丘、中越、北熊井中原、南福地に認められる程度で、残りの多くは円弧を呈している。

また人面を前周するものは、海戸、村上、草花松山前と明確に認められる例は意外と少なく、大部分の突起の隆線は下部では円とならず両脇の小リング、左右の口縁部に流入してΩ状（以後Ω文）を形成する。

水滴区画が顕著である御所前の人面文は、胴部に施文され、その意義は土器自体を母体と見立てた子の誕生寸前の相として捉えた出産文と解釈される。

面相は周知の古段階の人面と同一相であり、人面と出産文からは同一観念の下に製作がなされたことが想定され、同段階の樽型土器の胴部には出産モチーフが散見できる。

新期段階では、出産突起と双環突起の直下に水滴区画を配しその中に無紋面を埋める清水ヶ丘がある。共に明確な水滴区画とその中に団子状の面を配し共通概念が多く含まれているものと思われる。

Ω文は、新期段階の所産になると隆線文であったものが、造形的に誇張が目立つ（外郭隆帯Ω文も同様）一方、人面は小型化が進みΩ文に包み込まれ、その中に埋まる様相となる。相も目が極端に釣り上げたものや表情に変化が生じ、多相なものとなっている。このΩ文と人面部との関係を恋ヶ窪、平林を例にとってみると、人面とΩ文の関係が別固体、即ち母体（Ω文）と子（人面）の関係を表現した相が捉えられ増加する傾向にあり、これらを以後“Ω文系人面”と呼称する。このように人面装飾の中にΩ文を確認し、出産突起の出現と並行して人面突起におけるΩ文の発達と共に人面の変容を確認し、その後半では出産突起、Ω文系人面、出産文が同一宗教支配・観念（古期：Ⅳ類人面）の中から派生し地域毎に細分化が進んだ形跡が捉えられる。

3) 出産突起

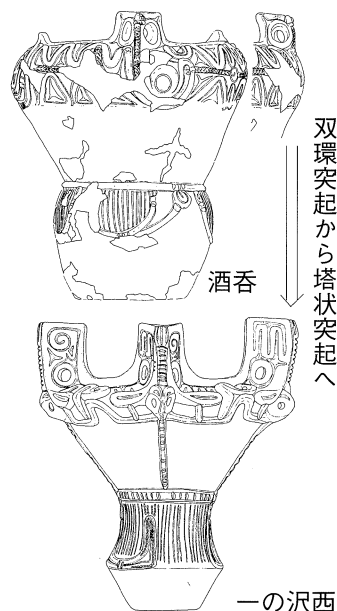
出産突起土器は中部山岳縄文中期の井戸尻期に属し、その中でも最も豪華絢爛とされている塔状突起土器群の主体を占めるものと考えられ、それを理解する前提として塔状突起の性格を把握した上で出産突起を考えたい。

塔状突起の初現は、北杜市酒呑遺跡・区画文第Ⅴ段階に認められる第97号住居内出土No.3,4の2個を上げる。土器の形態は中央で括れ上下に分割され上位はそのまま内湾しキャリパー形口縁部を形成し、次段階の形態とは大きな隔たり感が存在するが、底部での算盤底は前段より範疇の中に継続存在が認められる為個体のもつ個性にとどめておく。突起は大小の4個が交互に取り付けられ、その内一対が双環突起を形成する。大型な双環の頂部を平坦に整えた立面三角形の単純な形態であるが、塔状突起の原型として把握される。塔状突起土器の体部は底部算盤底、中央で括れ"く"字に屈曲する口縁部を有する一系に限定される。

ここでは前記の突起の上にさらに1～2段の立体装飾を乗せた縦長の中空突起が出現する。突起形態は今日まで大きくハヶ岳南麓～笛吹川左岸に分布する頂部三角、ハヶ岳南麓～多摩丘陵に分布する小筒形突起、笛吹川から多摩に観られる隆帯系突起と出産突起の4種が存在する。出産突起土器は、塔部を直立した蛇体に見立てた塔4本の内一対を出産突起にするのを基本としている。No.14,15その典型例であり頂部平面は、蛇頭を意識した前方が尖る2等辺三角に似た形態となり前方中央から1本の隆線が伸び末端双渦となる。頭部両側面はU字で体部は双環となつて大きな円窓に蛇頭が乗る形態となる。正面では、U字の延長で水平な沈線による口が表現されるが、蛇頭は独立しない。蛇頭直下のボタン状貼付以下からは、頂部が狭まり下部が円となる水滴状の区画が隆線文により区画され中には誕生直前の、子の頭部に見立てた団子状を呈する人面Ⅳ類（吉本、渡辺・1994）がつく（第3図、14・15）。

No.7では子に見立てた無紋面が今飛び出しそうな状態で水滴の円枠かはみ出し結果区画が省略されている。

子の表情を有する例は、目鼻口を有する後呂、口と無紋を交互にした九鬼Ⅱ、目の釣り上下げを交互に配したがあるが、基本形は無紋と思われる。また蛇頭が取り付けられない出産突起を保有する後呂もある。通常4個は塔状突起が取り付けられ、その内一対に出産突起が取り付けられる。



第3図 双環突起から塔状突起へ

以上、出産突起土器についての諸特徴と定義付けを行ったが、突起の容姿は左右がほぼ対照的であること、平面・三角の蛇頭を上位に体部には水滴区画を設けその中に無紋面類を埋め、子の出産状況とし蛇を親に見立てた出産を具象化した突起であることを確認した。

分布は、釈迦堂遺跡群の存在する笛吹川左岸地域を中心にハヶ岳南麓の甲ヶ原遺跡を北限に御坂山塊を超えた山梨東部・九鬼Ⅱを東限としている。盆地以外では長野方面で、水滴区画の中の人面と無紋面を表裏に有する例、東京では突起の頂部に無紋面が付く十内九さらに清水ヶ丘では双環把手の下部の水滴区画に出産突起に類似する人面が確認される。このように人面突起の新相段階では同一系統の中で、各小地域毎に独自に分化発展し、盆地タイプの出産突起の伝播は及ばないものと思われる。

4) 製作目的と製作者像

この土器の製作目的において特筆すべき点は、既に述べてきた通り、通常と異なる死に直面した人々が土塚墓に土器棺を埋納するにあたり、特別な目的をもった土器を製作したという事実であり、宗教支配の下で儀式を執り行う儀式専用道具としての目的的製作が行われた結果の所産であり、一般の土器を転用したものではないということである。

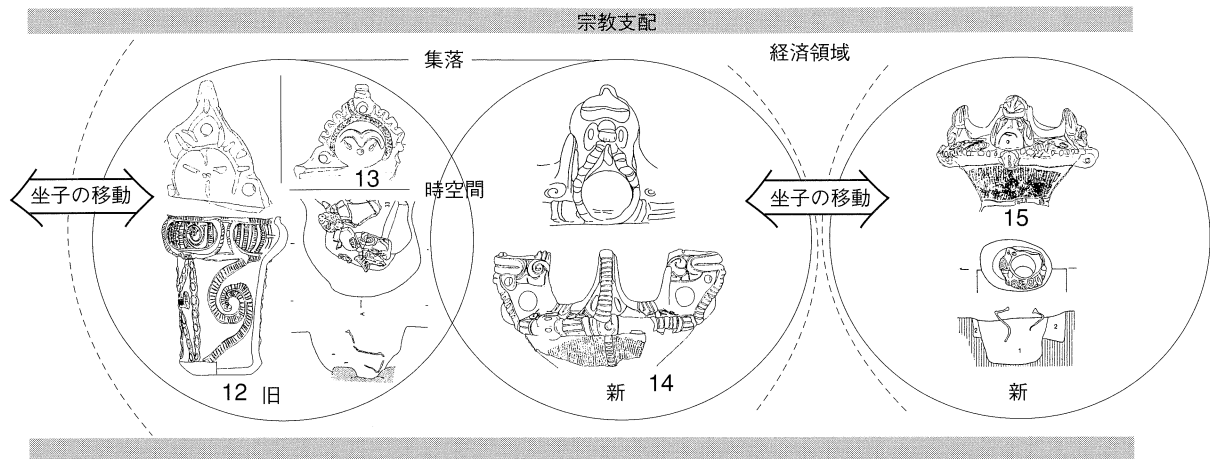
また、土器製作という行為に対しても単なる労働としてではなく儀式の初期段階としての道具製作が位置付けられるのである。

製作時には、儀式の過程の中で「誕生寸前の動態」を具象化した道具に対して打ち欠きすることを前提として製作に及んでいた訳で、そこには突起の具象に現れているとおり「死産児」あるいは出産に失敗した「母親と胎児」の死という現実がそこに存在したのである（梅原2004）。このことから鎮魂や再生を願った複雑な呪術が行われる過程で、中心となる儀式専用道具に対しても、自然界との仲介をはたす装置として特別な意味を持たせる必要があったものと考えられる。

ここにも呪術が介在し現世の不浄なものから神器への転化がなされたであろう事は想像に難くない。また、土器製作の製作作業に対しても単純な労働というだけでなく儀式の初期段階としての道具（出産突起土器）製作が意義付けられるのである。

このような儀式関連土器は、特殊ゆえに製作の機会は少なく、制約された条件下で行われたものと思われるが、甲府盆地と山梨東部地域との間には3000m級の御坂山塊という障害物が存在し迅速な文化交流を阻まれていた野呂原14と九鬼Ⅱ15の両者の間では、同時期、同タイプの出産突起土器の出土をみた。この遠距離間にある二遺跡の関係について検討を加えることが、土器制作者の実態の把握に最も有益なものと考えられる（第4図）。

縄文中期中葉の土器は、装飾に重点をおき実用性を無視した日常的な生活道具として理解されていることは周知の通りであり、集落の構成員であれば誰でも特に女性は（技



第4図 出産突起と坐子の移動

術会得)・(伝達・記憶保存)・(思考再生・技術再生)を繰り返す中で土器の製作可能な技術を保有できるものと認識されている。

しかし、突起部製作に関しては前に述べているとおり非日常的なものであり特殊な製作知識と儀式を司る能力を会得し、両方の知識を兼ね備えた人物像が要求されたものと思われる。

従来の土器伝播では集団移動、物質交流、婚姻等による人的交流等云々による伝達法があるが、死産児や母親をまきこんだ死は、妊娠期間という長期な月日を時間幅として有し、この間の不慮の事故についてはある程度の予測はなされていたものと思われるが、上記の伝播論から観れば突発的な事象であり一般の交流による土器伝播論では時間的・宗教観念の問題等を解決すべき点が多く、複雑な思考と体系を内包する突起土器製作は一般の集落構成員には成しえなかったものと考えられる。

縄文中期中葉の時代は、生活の中心に集落、外枠に経済領域を保有し常時宗教支配下にあったものと考えられ(図4)、縄文土器の型態は一集落にとどまらず百km以上に及ぶ例も少なくない。このことは集団領域間を季節を問わず自由に行き来する一群の存在を置かなくては解決されるべきでは無いと思われる。自然界との媒介に通ずる人間や(Boyer 1996) また子の出産関わる知識、実践に詳しい人間を抱えた巫女一家の存在である。死産児、小児の早死にしたものは再生できると信じられていた(岡本 1984、大塚 1979) 時代においては、彼らは宗教支配の下で自然界との媒介者として各集落間を自由に往来できたのである。先にも記したが儀式の初期段階としての道具製作を位置付けたが、その際の究極の目的は出産突起という具象的な意匠の製作そのものではなく巫女と共に現世と自然界とを往来する為の、土器から装置への転化儀礼でありそれは巫女のみ宿している能力であったと信じられていたのである。製作後は、巫女主導による体部の上半以下と突起部の打ち欠きに認められる呪術行為が加えられ、あの世での正常の形(梅原 2004)に戻され棺となし、胎児・新生

児の再生を願う儀式過程の中で墓壇に埋納されたものと思われる。

このような儀式での巫女と装置(土器)の関係は出産突起に限らず、使用する装置との関係において表裏一体となっていたものと考えられ、儀式を執り行う回数が重ねられる毎に、それらは彼らの知的蓄財として保有されると共に、それらに比例して集落からの儀式の要請の頻度は高まっていったものと解せられ、次第に直接生産労働に携わることのない非労働・巫女一家の行動様式も順次定まっていったものと考えられる。

この趨勢の中で儀式専用土器及び関連遺物に対する製作権は儀式・初期段階から作り出された装置として意義付けられ、巫女一家による土器制作権の独占(渡辺 1990)を許していったものと思われるのである。

あとがき

出産突起土器の製作目的を、出産に失敗した胎児埋葬の為の専用道具と特定し、その製作工程を儀式の初期段階とした。さらに巫女の製作関与と以後の独占化を示唆したが、一の沢等の複数埋納墓壇の土器セットについても当然巫女関与との所産と考えているが言及することができなかった。さらに、これらに後続する渦巻突起土器群についても同様な考えを持っているので、併せて機会をかねて公表する予定である。

参考文献

- | | |
|------------|---|
| A.V. ジェネップ | 1997 秋山さと子・彌永信美 通過儀礼 |
| 大塚和義 | 1979 縄文時代の葬制『日本考古学を学ぶ3』 |
| 菊池 実 | 1983 甕棺葬 縄文文化の研究9 |
| 岡本孝之 | 1984 縄文人の死産児 異貌11号 |
| 渡辺 仁 | 1990 『縄文式階層化社会』 |
| 吉本洋子・渡辺 誠 | 1994 人面装飾付土器の基礎的研究 日本考古学1 |
| P. Boyer | 1994 『The Naturalness of Religious Ideas』 |
| 小林謙一 | 2004 『縄文社会研究の新視点』 |
| 梅原 猛 | 2004 縄文時代の世界観 『縄文人の世界』 |
| 小林広和 | 2005 U字蛇頭を冠する突起の類系 長沢宏昌氏退職記念考古論功 |